

# 古典派音楽の時代

## ～フランス革命と市民の音楽～

(18世紀～19世紀初頭)

サウンドデザイン演習  
女子美術大学 石井拓洋  
[ishii05042@venus.joshibi.jp](mailto:ishii05042@venus.joshibi.jp)

2016

introduction

理学

法学

情報学

文学

藝術

歴史学

工学

医学

introduction

古いもの

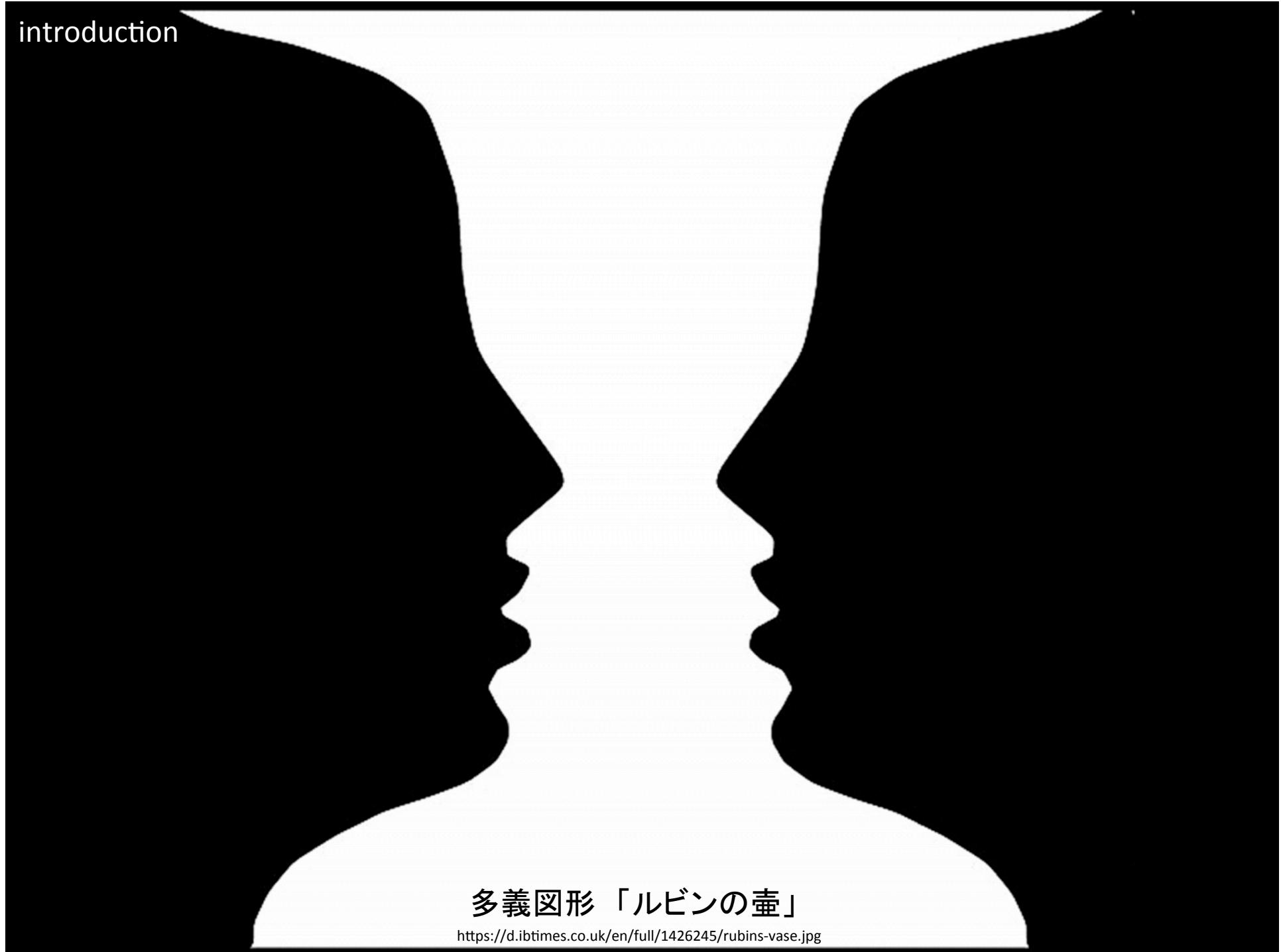
新しいもの

## introduction

「新しい」と「古い」が存在しえるための「軸」



introduction



多義図形 「ルビンの壺」

<https://d.ibtimes.co.uk/en/full/1426245/rubins-vase.jpg>

## introduction

「新しい」と「古い」が存在しえるための「軸」



「西欧近代主義」を どうとらえていくか？

「自律藝術」を どうとらえていくか？

# 本日の流れ

## 1. 「古典派音楽」が生まれる時代背景

※音楽に限らず「芸術の誕生」に関わるうえで重要

## 2. 「古典派音楽」の音楽的特徴

## 3. 「古典派音楽」の代表的作曲家

18世紀のヨーロッパ。  
この時代の音楽の文化的な意義とは？

# 18世紀のヨーロッパにおいて

「神に捧げるためでもなく、

王侯を賛美するためでもない、

『市民による、市民のための、市民の心に訴える音楽』が、  
初めて生まれたのである」

[ 岡田 2005 :96]

# 「近代」とは？

## きんだい 【近代】

1

### 時代背景

2. ( modern age ) 歴史の時代区分の一。広義には近世と同義で、一般には 封建制社会 のあとをうけた 資本主義社会 についていう (広辞苑 p.733)。

中世  
↓  
近世

11C頃 「封建社会」  
17C頃 「絶対王政」 を経過

(主従関係)



↓  
近代

18C末 「フランス革命」  
「市民社会」の成立 (封建社会の打破)

(自由と平等)

# 「古典派音楽」が生まれる時代背景

1

時代背景

## 近代主義 modernism とは

# 近代主義 modernism

1  
時代背景

- ・秩序よりも進歩
- ・宗教よりも科学
- ・個別主義(※具体)よりも普遍主義(※抽象)
- ・属性原理(※身分など)よりも業績主義(※実力)が尊重

封建社会から資本主義社会への進化・発展の駆動力の一つが、この種のエース。

(高橋徹 「近代主義」 『世界大百科事典7』 平凡社、pp.630-631より)

「この種のエース」  
(持続的な特徴)

=

啓蒙主義 的特徴  
(蒙きを啓らむ、くらきをあきらむ)

## • 啓蒙思想

Enlightenment

1

時代背景

- 17Cから18Cの西欧における旧弊打破の革新的な思想
  - 合理的**理性**を尊重し、**進歩主義**を標榜した
  - 理性的思惟によって**宗教的権威**や**王侯貴族**に抵抗した
  - 政治、教育を通して人間生活の**幸福の増進**を理念とした
  - **基本的人権** (自然権 = 人が生まれながらに有する権利) の萌芽
  - その成果は『百科全書』 (ディドロら編, 1751-80) に編纂
- 
- 「キリスト教・王侯貴族」のためから、「市民」のための文化へ
  - 啓蒙思想が「近代」を導いた

1  
時代背景

「**啓蒙主義** とは『伝統社会』からの脱却である」

「[ヨーロッパの]『伝統』の破壊と『新しい価値』の創造こそが  
**啓蒙主義** 精神の主眼だった」

「**啓蒙主義** とは まさしく 人間を『神』とする思想 だった」

松宮秀治『芸術崇拜の思想』pp. 80-82.

啓蒙思想 → 市民革命(フランス革命)

1

時代背景

# 啓蒙思想 → 市民革命(フランス革命)

- ・ 絶対主義を解体させて、近代に特有な「市民社会」を実現させる革命
- ・ ここでの「市民」とは?
  - 国政に参加する国民。国の形成に自律的・自発的に参加する人。
  - 市民 = 大土地所有者、資本家、高級官吏、非貴族、商人、芸術家、農民
- ・ 「宗教的権威」と「王侯貴族」からの人間の自立（近代のはじまり）
- ・ 基本人権の確保（言論・表現の自由）

1  
時代背景

※ 「藝術」は 西欧近代主義の產物であるが、  
「近代」をひらく歴史的契機となった  
「フランス革命」の様子を、映像で観ておきたい。

テレビ映画作品 『王妃マリー・アントワネット』(2006)  
(フランス制作, 抜粋 20分程度)

(※ ソフィア・コッポラによる映画よりも見応えがある!?)



テレビ 映画作品 『王妃マリー・アントワネット』 (2006, フランス制作, 抜粋20分) ※ DVDでも出版されている

絶対王政の時代のフランスでは、国民の身分は三つの身分に大別されていた。

第一身分は聖職者、第二身分は貴族、第三身分は、新興資本家階級(ブルジョワ階級)、小商人、職人、小市民、芸術家(以上、プチブルジョワ階級)、農民。市民革命は第三身分による革命。

# 啓蒙思想と「藝術」（近代藝術）

「『藝術』という概念がヨーロッパの芸術理論において確立したのは、十八世紀中葉から末葉にかけてのことである」

「十八世紀中葉以前には、今日われわれが『藝術』と呼んでいるものを〔略〕指示す概念ないし術語は存在しなかった」

「『藝術』という概念は「近代」の所産にほかならない」

※上記全て [小田部 2001: 3]

# 啓蒙思想と「藝術」(近代藝術)

「古来、進歩的思想という、もっとも広い意味での啓蒙が追求してきた目標は、人間から恐怖を除き、人間を支配者の地位につけるということであった」  
[ホルクハイマー & アドルノ：3]

「人間が世界の主人となるということは  
人間がみずから神に代わる存在となる ことを意味する」 [松宮：80]

「『藝術家』とは理念的にはみずから神となって、自己の作品を通じて、歴史と社会がいまだ発見しえなかつた新しい価値を創出する『創造者』となることである」 [松宮：67]

啓蒙思想が批判した文化的対象は？

## ロココ様式 Rococo Style (音楽)

- ロココ音楽

バロックの後、古典派音楽の前。

ルイ15世の時代(在位 1715- 1774)

装飾的表现、優美・軽快、貴族的・フランス的

代表的作曲家 フランソワ・クープラン(1668-1733)

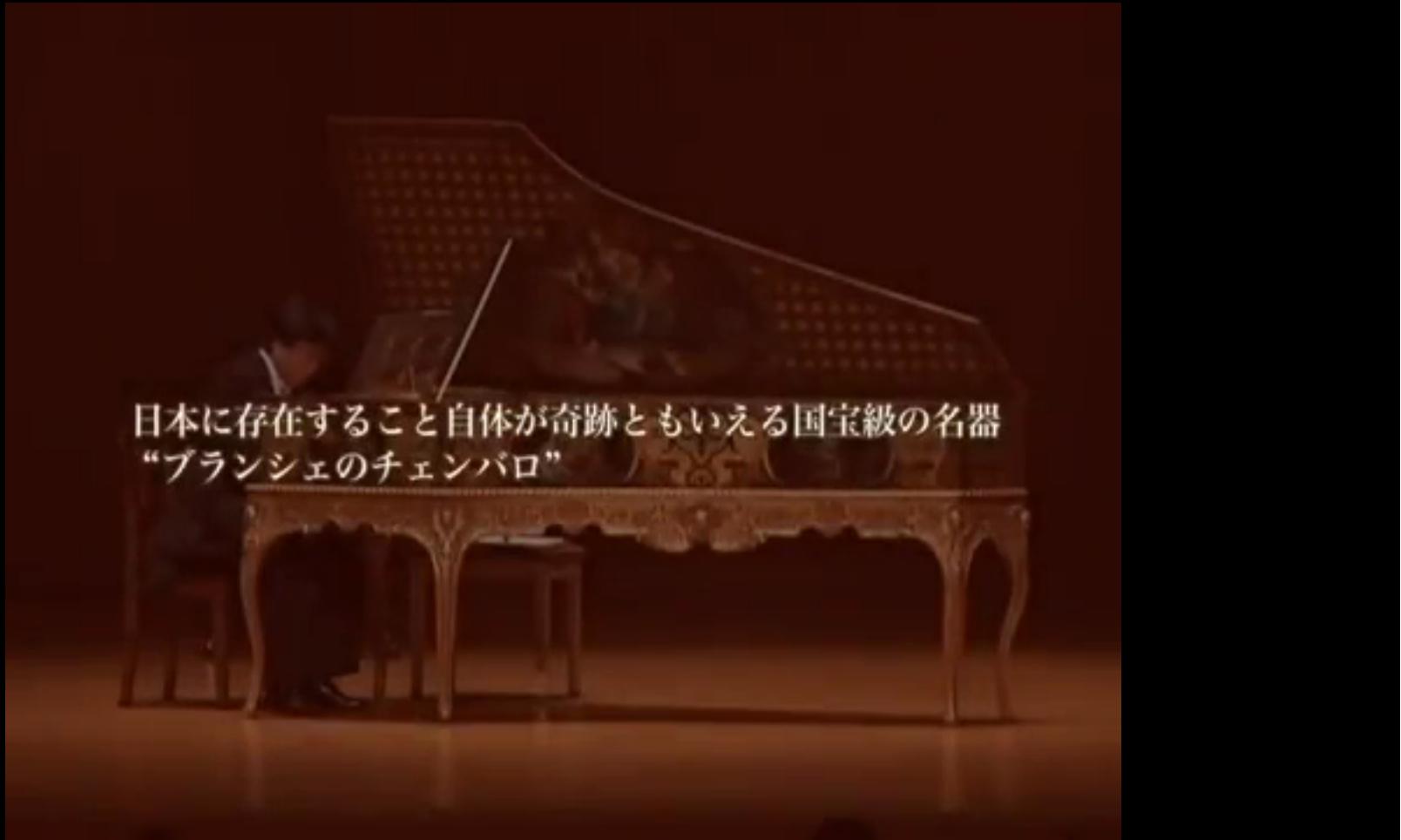
- フランスのルイ15世時代の宮廷作曲家
- ギャラント様式
- ロココ音楽の代表作に「クラウザン曲集 1巻～4巻」(1720年頃)

啓蒙思想が批判した文化的対象は？

# ロココ様式 Rococo Style



D.ツィンマーマン設計 「ヴィース巡礼教会」(1745頃) (ドイツ)



ロココ音楽 Rococo Style Music の例 (映像: 3分程度)

Youtube 「【中野振一郎氏演奏】18世紀フランスのチェンバロ / Blanchet Harpsichord」より

(この映像内の曲目)

1. ジャック・デュフリ 《クラヴザン曲集 第2巻》より <ラ・ヴィクトワール>
2. フランソワ・クーブラン 《百合の花ひらく》
3. ジャック・デュフリ 《三美神》

文化的分野で、啓蒙主義的に、絶対王政を批判したのが、、

# ヴァインケルマン

J.J. Winckelmann ( 1717 – 1768 ) ドイツの美術史家

『ギリシア美術模倣論』 (1755 )

- 享楽的・感覚的な宮廷文化を表すロココ文化の批判
- 美の規範を、古代ギリシャ藝術（彫刻）にもとめた。
- ロココ文化を「リセット」して、新たな進歩的な文化の創設を志向した（新古典主義へ）



画像: wikipedia「ヨハン・ヨアヒム・ヴァインケルマン」より



画像:<http://art.pro.tok2.com/l/Ingres/vv009.htm>

《オイディップスとスフィンクス》(1808)



画像:<http://art.pro.tok2.com/l/Ingres/Ingres4.htm>

《グランド・オダリスク》(1814)

## ヴィンケルマンが良しとする様式

新古典主義絵画

ジャン=オーギュスト・ドミニク・アングル (1780 - 1867, 仏)

# 啓蒙主義的藝術論としての ヴィンケルマン『ギリシア美術模倣論』(1755) の主張

1. 〈創造性〉は神のみがもつという神話がダメ
2. 自然、それ自体を模倣することがダメ



画像: wikipedia「ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン」より

# 啓蒙主義的藝術論としての ヴィンケルマン『ギリシア美術模倣論』(1755) の主張

## 1. 〈創造性〉は神のみがもつという神話がダメ

- ※ 人間だって創造することができる。場合によっては「天才」になれる。
- ※ 人間中心主義、機械論、進歩主義などの現れ

## 2. 自然、それ自体を模倣することがダメ

- ※ 自然を、ではなくて、ギリシア美術の作品を模倣すべし。  
なぜなら、ギリシャ彫像の輪郭の美は、自然美と理想美の  
両者を一つにする最高の観念だから。線描への価値付け。  
(ヴィンケルマン 30)。

- ※ 人間中心主義、合理的精神のあらわれ？



画像: wikipedia「ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン」より

# 啓蒙思想の特徴：「近代」(藝術) の特徴

- **西洋中心主義**

西洋こそが世界で最も進んだ文明であるという考え方

- **要素還元主義**

物事(藝術を含む)の本質をさぐるには、本質以外の余計な要素を極力排除すべしとする考え方

- **進歩主義**

新しいことは良いことだとする考え方

- **人間中心主義**

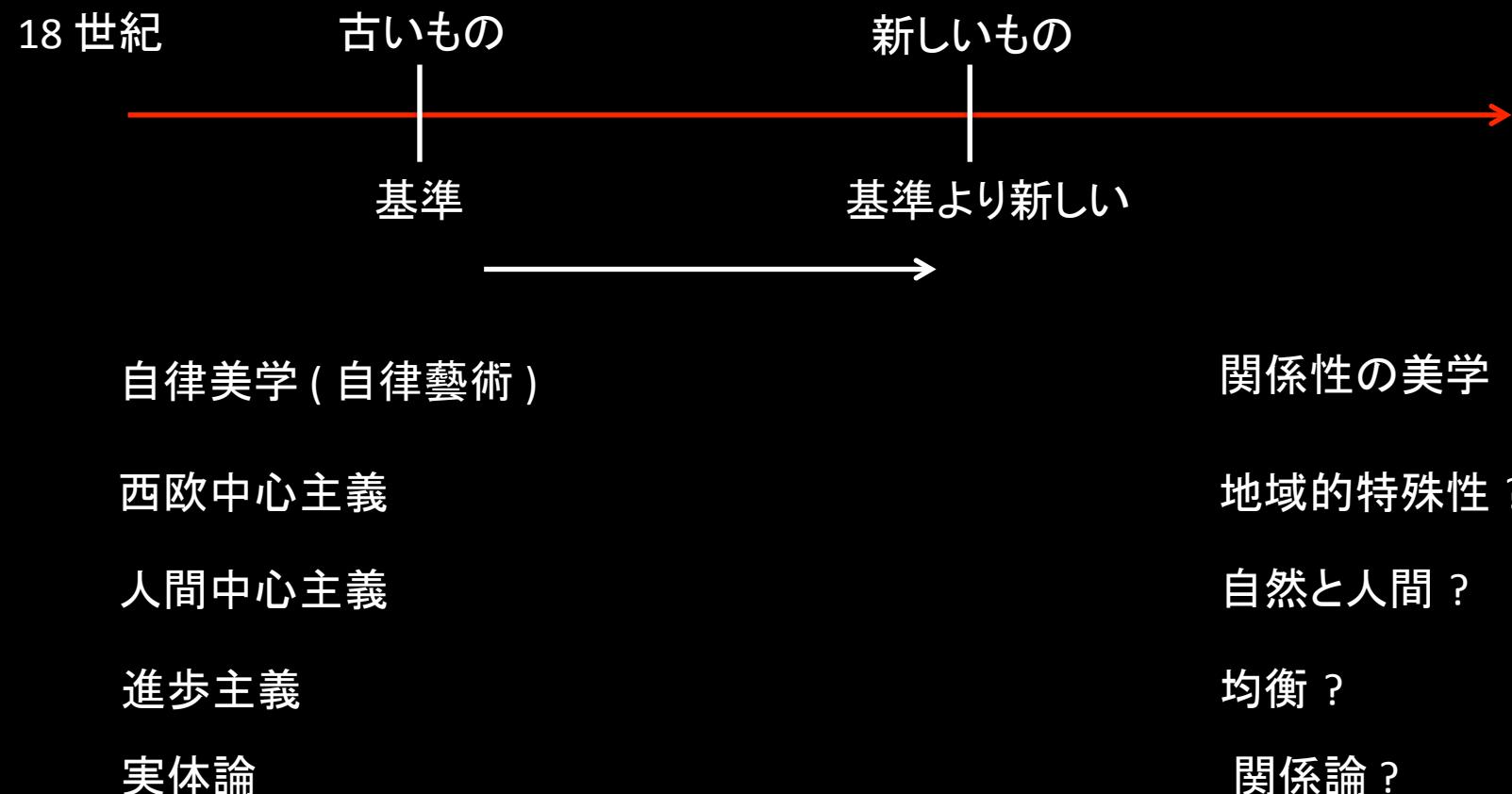
人間は科学によって、自然を制御することができるとする

※西欧近代における「人間中心主義」の特異性

「世界のいかなる文化圏、文明圏も西欧の啓蒙主義のような不遜な思想をもつことはなかった。どの文明も人間以上の存在者を認め、それに服することによって世界と共に存してきた」[松宮：80]

「新しい」と「古い」が存在しえるための「軸」

# 藝術分野



# 啓蒙思想と「藝術」(近代藝術)

啓蒙思想と市民革命を経た近代において、

ヨーロッパは、18世紀に至り、他分野とは異なる「藝術」

個人における個性的な創作としての藝術が誕生する基盤が整う。

つまり、この時期にいたって、

現代の我々が考える一般的な意味での  
「藝術」が生まれはじめる。

「個人による個性の表現」&「創造性の開示」としての「藝術」

「自律藝術」

# 市民革命と「展示」=美術館の誕生

- ・フランス革命以後「ルーブル美術館」の前身ができる。

「ミュゼ・ドゥ・ラ・ルピュブリック」

(フランス共和国中央芸術博物館)という名の美術館が開館 (1793)

- ・「万国博覧会」がはじまる (パリ)

万国博覧会のルーツ 「国内博覧会」(パリ, 1798) = 様々な物品を集めて展示する博覧会

1849年までにパリで11回開催

- ・文化藝術の担い手が、王侯貴族から「市民」へと移行

## 2. 「古典派音楽」の音楽的特徴

2

## 音樂的特徵

# 年代時期と音楽的特徴

・【時期】1740年頃 → 1809年(ハイドンの死)まで

## 【前史】

- バロック(劇的表现、重厚(通奏低音)、構築的)
- ロココ(装飾的表现、優美・軽快、貴族的)



古典派音楽(理知的表现、自然な感情発露、等身大の人間像)

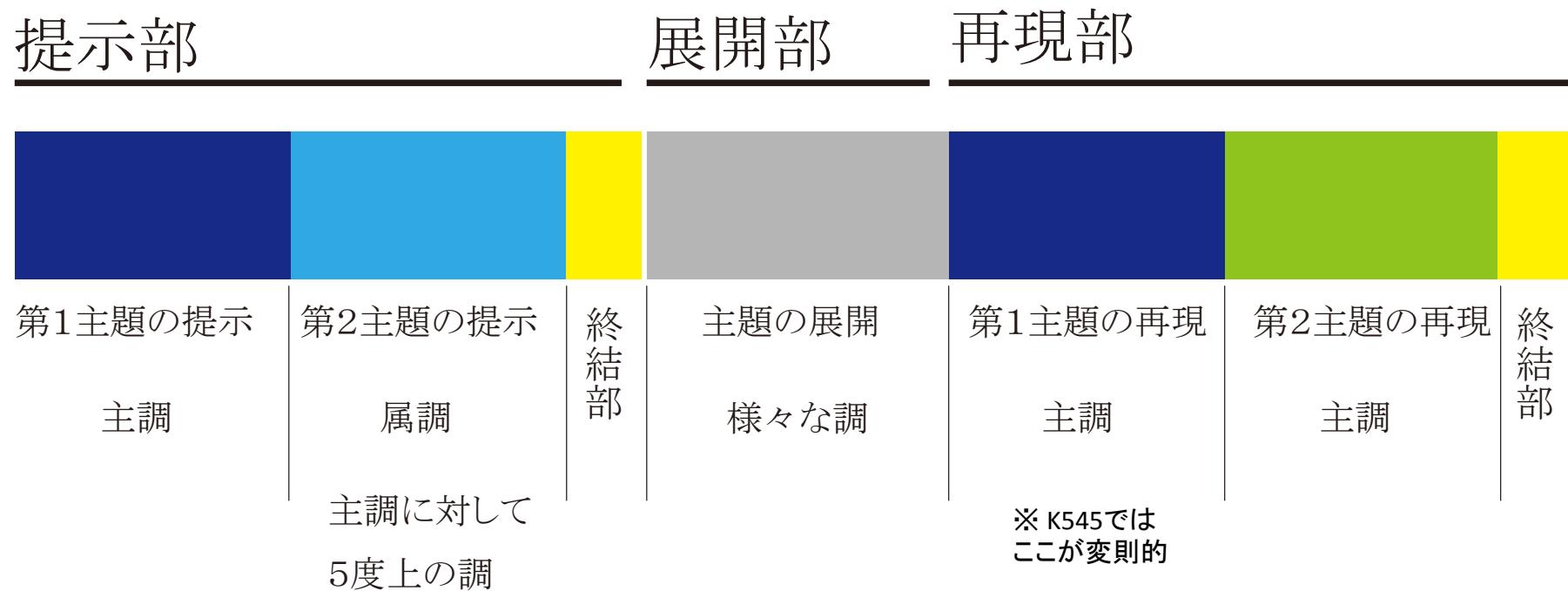
2  
音楽的特徴

# 古典派音楽の特徴

- ・他の要素に頼らない自律的な音楽表現を追求 → 声楽から器楽へ
- ・オペラ、協奏曲 から → ピアノソナタ、交響曲、弦楽四重奏曲へ
- ・宫廷音楽(王様のための音楽)から → 個性を表現する音楽の萌芽
- ・対位法の様式(旋律の重なり)から → 和声音楽へ
- ・「自律的音楽」の形式としての「ソナタ形式」

「自律美学」を反映するものとしての

# 古典派のソナタ形式とは



(※ モーツアルト ピアノソナタ 第15番 第1楽章 K545 の例 で解説、2分30秒)



# 古典派の作曲家

3  
作曲家

# 古典派の作曲家



フランツ・ヨーゼフ・ハイドン  
Haydn, Franz Joseph

(1732-1809)

『弦楽四重奏曲 第77番 皇帝』  
～第2楽章



ドイツ国歌。

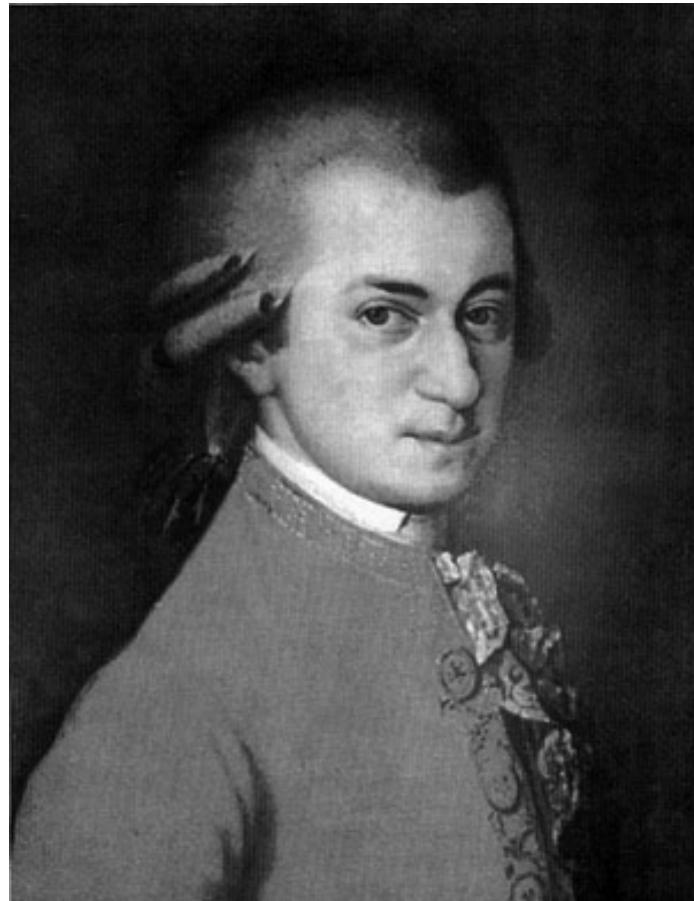
もともとは  
オーストリア皇帝フランツ1世の  
誕生日に捧げた曲 (1797)。

# ヨーゼフ・ハイドン

(彼の生活)

- ・少年期はウィーンのシュテファン大聖堂 の合唱団員。しかし声変わりで解雇。
- ・10代後半からの10年間は、不遇のウィーン生活。貧困と独学。
- ・作曲は独学。(意外と !? ) 叩き上げの苦労人。
- ・ハンガリーの貴族の宮廷楽長としての職務を30年間勤める。
- ・退職後、年金を貰いながら、さらにウィーンでの音楽活動を行う。
- ・オックスフォード大学から名誉音楽博士号授与。
- ・享年 77歳

# 古典派の作曲家



モーツアルトの肖像画（バルバラ・クラフト作、1819年）

W.アマデウス・モーツアルト  
Mozart, W.A.

(1756-1791)

『アヴェ・ヴェルム・コルプス』  
K.618 (1791)



最晩年の傑作。  
リストやチャイコフスキーも編曲。

# W.A.モーツアルト

(彼の生活)

- ・ザルツブルグの貴族の元で宮廷音楽家となるが、喧嘩して解雇される。
- ・ウィーンに移住して、フリーの音楽家となる。
- ・前職の経緯があり、ウィーンのハプスブルグ帝国の皇帝から警戒され冷遇。
- ・貴族の子弟にピアノを教えたり、作曲料で生活する（商業音楽家的生活）。
- ・後年、宮廷室内楽作曲家に任命されるが、これは薄給のポストであった。
- ・享年 35 歳

# 古典派の作曲家



L.ヴァン・ベートーヴェン  
Beethoven, L. V.

(1770-1827)

『ピアノソナタ 第21番 ハ長調  
ヴァルトシュタイン』op.53 (1804)



彼の音楽活動を生涯支えてくれた  
ボンの貴族、ヴァルトシュタイン伯  
に捧げた曲。

# L.V.ベートーヴェン

## (彼の生活)

- ・14歳で宫廷礼拝堂のオルガニスト。
- ・17歳で尊敬するモーツアルトに会うためウィーンへ。しかし全く関心を持たれず。
- ・ボンの貴族・ヴァルトシュタイン伯に、生涯、彼の音楽活動は支えられた。
- ・22歳の時、ハイドンに認められ、ウィーンへ留学。そのまま移住。
- ・実は貴族に好かれる人であった。
- ・精神性の表現として象徴的な存在に思われるが、  
  実は、ハイテク音楽が大好きだった（ピアノのペダルの新たな使用法など）
- ・後年、ハプスブルグ家より年金を貰うが、難聴と甥の放蕩に悩む。享年57歳。

# 主な参考文献・さらなる知識のために

- ・石井宏 (2004)『反音楽史:さらばベートーヴェン』新潮社
- ・ヴィンケルマン (1755 = 1976 )『ギリシア美術模倣論』澤柳大五郎訳、座右宝刊行会
- ・小田部胤久(2001)『芸術の逆説』東京大学出版会
- ・岡田暁生(2005)『西洋音楽史』 中公新書
- ・佐々木健一 (2004)『美学への招待』中公新書
- ・高橋徹「近代主義」『平凡社 世界大百科事典 7』平凡社
- ・ドナルド・H・ヴァン・エス (1981=1986)『西洋音楽史』新時代社
- ・西村清和 (1995)『現代アートの哲学』産業図書
- ・パウル・ベッカー (1926=1951)『西洋音楽史』 河出文庫
- ・松宮秀治 (2008)『芸術崇拜の思想』白水社
- ・渡辺裕 (1997)『音楽機械劇場』新書館